

天平感宝元年五月五日に 東大寺の占墾地

使の僧平栄等に饗す。ここに守大伴宿禰家

持、酒を僧に送る歌一首

四〇八五番

焼き大刀を 礪波の関に 明日よりは 守部遣り

添へ 君を留めむ

同じ日の九日に、諸僚、少目 秦伊美吉石

竹の館にて会ひて飲宴す。ここに主人百合の

花縵三枚を造り、豆器に置ね置き、賓客

に捧げ贈る。各この縵を賦して作る三首

四〇八六番

油火の 光に見ゆる 我が縵 さ百合の花の

笑まはしきかも

四〇八七番

燈火の 光に見ゆる さ百合花 ゆりも逢はむ

と 思ひそめてき

四〇八八番

さ百合花 ゆりも逢はむと 思へこそ 今のまさ

かも 愛しみすれ